仇討ちって何だ？

松本侑壬子・ジャーナリスト

２年前の第57回カンヌ国際映画祭で日本に史上最年少の主演男優賞（柳楽優弥君、14歳）をもたらした映画『誰も知らない』（是枝裕和監督）は、実在の事件をモデルに現代日本の家族のありようを子どもの視点から鋭く、しかしまた温かく描いた作品であった。

是枝監督は、『誰も知らない』をつくりながら、ずっと「次は楽しい嘘をついてみたい」と考え続けていたという。ミュージカルか時代劇か…。その結果、選んだのが本作、願いどおり監督初の時代劇である。江戸の片隅の貧乏長屋を舞台に、常識無視の人物設定あり、どたばた喜劇あり、時代劇の約束ごと無視のどんでん返しあり…本当に楽しい嘘だ。

元禄15年の江戸 ── と言えば、時代劇ファンなら常識の、年末に赤穂浪士の討ち入り事件が起こった年。五代将軍・綱吉治下のこの時代、親や主君の仇討ちには相当額の報奨金が出されたという。

貧乏長屋に住む若侍・青木宗左衛門（岡田准一）も、父の仇を追って信州から上京してかれこれ2年になる。めざす仇は一向に見つからぬままに、長屋の住人らとの交流は深まり、ほのかに好きな子連れ未亡人おさえ（宮沢りえ）や遊び仲間らとの長屋生活が身についてくる。故郷からの仕送りでは足りず、寺子屋を開き、手習いや算術を教えて生活の足しにしている。侍なんだからと、子どもに剣術も教えてと頼まれるが、公衆の面前で散々に無様な姿を曝してしまい、“弱ぇ侍”なことはもう長屋の全員が知っている。

実は、宗左は探す仇（浅野忠信）がつい目の先にいることに気がついていた。しかし、刀を捨てて人足になり妻子と共に穏やかに暮らすその姿を見て、とても今さら刃を交える気にはならない。もっとも、そういう事態になれば、やられるのはどっちかは、自分が一番わかってもいるのだが。

そんなことよりも、長屋の日常は何と目まぐるしく面白いドラマに満ちていることだろう。その一つひとつにかかわったり、目撃したり感動したりしているうちに、仇討ちなんて後回しになってしまう。しかし、長屋には本人の思いとは別に、そうは思わない者たちがいた。身分を隠し主君の仇討ちを至上の生き甲斐として着々と討ち入りの準備を進める赤穂浪士たちだ。宗左を吉良側の間者（スパイ）かもしれぬと疑い、メンバーの一人で碁の趣味のある寺坂（寺島進）を宗左に近づかせ探りを入れさせる。

すっかり親しくなった寺坂は碁を打ちながら「何とか武士らしい死に方をすれば、息子は武士の子として生きていける」と話す。その言葉が宗左にある決断を促す。以前、おさえのつぶやいた言葉が胸の奥にふつふつと発酵していたからだ。「お父上の人生が宗左さんに遺したものが憎しみだけだとしたら、寂しすぎます」と。そのおさえ母子自身が仇討ちの遺族だった。宗左が長屋の連中の助太刀を得て無事に果たした“仇討ち”とは…。

弱かった人が努力して強くなる、のではなく、弱いなりに肯定され、周囲との関係の中でその弱さの意味が変わっていく…「そんな変化の映画」だと、是枝監督は“楽しい嘘”の種明かしをしている。どうりで居心地のいい映画な訳である。

日本映画（127分）／是枝裕和監督

●

『　花よりもなほ　』

６月３日より全国松竹系でロードショー

©2005「花よりもなほ」フィルムパートナーズ